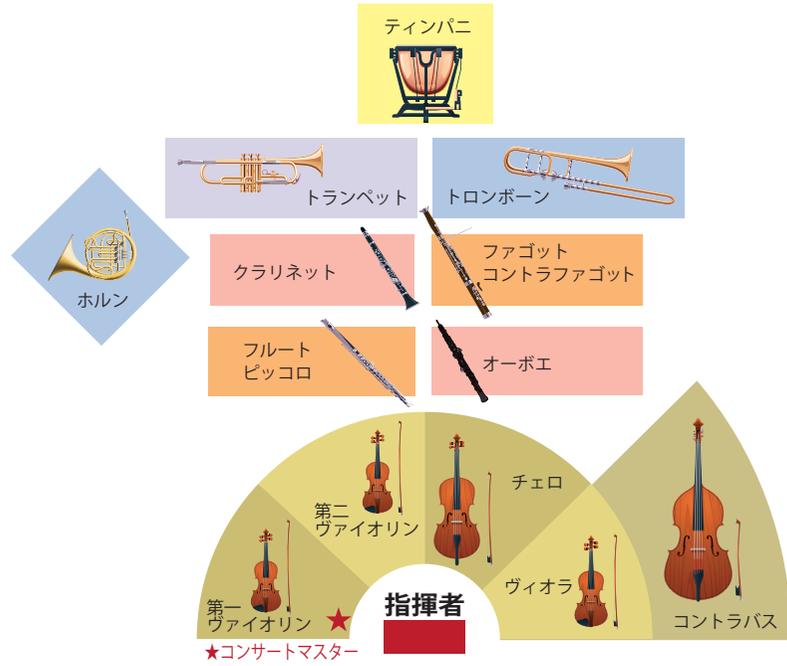


【オーケストラ配置図】
3/14 都響調布シリーズ No.26

※楽器の配置は一例です。
当日のステージで確認
してください。



★コンサートマスター

Profile



指揮
小林研一郎 Ken-ichiro KOBAYASHI, Conductor

1974年 第1回ブタペスト国際指揮者コンクール第一位および特別賞を受賞。2002年プラハの春音楽祭では東洋人として初めてオープニングの「わが祖国」を指揮して万雷の拍手を浴びた。これまで国内外のオーケストラと共演を重ね、数多くのポジションを歴任。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授他。旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞、ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章等を受賞。 OFFICIAL WEBSITE <https://maestro-kobaken.com/>



©Kazumi Kurigami

ヴァイオリン
木嶋真優 Mayu KISHIMA, Violin

2000年第8回リピンスキ・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクール・ジュニア部門にて日本人として最年少での最高位をはじめ多数のコンクールで受賞。デュトワやプレトニョフなど世界で活躍する指揮者やオーケストラと共演を重ねている。ケルン音楽舞踊大学、同大学院を首席で卒業し、ドイツの国家演奏家資格を取得。リサイタル、オーケストラとの共演などの幅広い活動のほかメディアへの露出も多い。使用楽器は、宗次コレクションより特別に貸与されたアントニオ・ストラディヴァリ 1699年製「ウォルナー (Walner)」。

管弦楽
東京都交響楽団 Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

東京オリンピックの記念文化事業として、東京都が1965年に設立し、2025年に創立60周年を迎えた。都響(ときょう)という愛称で親しまれている。東京文化会館(上野)を本拠地として、オーケストラの演奏会を開催する他、交響組曲『ドラゴンクエスト』(全シリーズ)などゲーム音楽の演奏、教育活動や福祉施設での出張演奏など多彩な活動を展開している。



©Rikimaru Hotta

ヤングシート

Young Seat

3/14 2026 (土) 会場 調布市グリーンホール

調布シリーズ No.26
Chofu Series No.26

指揮 / 小林研一郎
ヴァイオリン / 木嶋真優

メンデルスゾーン：
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 op.64
(約28分)

ベートーヴェン：
交響曲第5番 ハ短調 op.67 《運命》
(約35分)

**ホールでの
過ごし方**

- ◎携帯電話など音や光を発するモノは電源を切りましょう。
- ◎演奏中は静かに聴きましょう！周りの人も演奏を楽しんでいます。
- ◎公演中の録音・録画、写真撮影は禁止です。終演後のカーテンコール時のみ写真の撮影が可能です。

東京都交響楽団



都響ヤングシートは、企業や団体からご支援をいただき、休日昼間の都響主催公演を中心に青少年と保護者をご招待し、オーケストラコンサートをお楽しみいただいています。ご支援企業については月刊都響をご覧ください。

[[Program Notes]] プログラムノート

今日のコンサートでは、クラシック音楽の中でも特によく知られている名曲が2つ演奏されます。どちらも最初のメロディーを耳にすると「聞いたことがある！」と思うかもしれません。でも最初のヴァイオリン協奏曲は3つの楽章、次の交響曲は4つの楽章でできています。全部を通して聴いてみると、いくつも新しい発見や感動に出会えることでしょう！

メンデルスゾーン： ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品 64

「協奏曲」とは、ひとりで楽器を演奏する人（独奏者またはソリストと呼ばれます）とオーケストラとが、対話するように響き合いながら演奏する音楽です。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲は、世界中で愛されている名曲中の名曲。ベートーヴェン、ブラームスのヴァイオリン協奏曲とならんで「3大協奏曲」の一つに数えられています。



Felix Mendelssohn

作曲者のフェリックス・メンデルスゾーン（1809～1847）は、ドイツで裕福な銀行家の息子として生まれました。幼い頃から音楽の才能に恵まれ、指揮者としても大活躍し、26歳でライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督となりました。

この曲が生まれたきっかけは、そのゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダーヴィトのためにメンデルスゾーンが作品を書きたいと思ったことでした。音楽家同士の深い友情が、この美しいメロディーを生み出したのです。構想を練り始めてから6年後、1844年の夏にようやく曲は書き上がり、ダーヴィドからのアドバイスを加えたバージョンが、1845年の春（メンデルスゾーン36歳）に初演されました。独奏はもちろんダーヴィトです。しかし、メンデルスゾーンは体調があまりよくなく、指揮はできず、また演奏にも立ち会うことができませんでした。この曲が、メンデルスゾーンが完成させた最後のオーケストラ作品となりました。

曲は全部で3つの楽章でできています。第1楽章は、冒頭からすぐに独奏ヴァイオリンが登場し、一度聴いたら忘れられない素敵なメロディーを奏でます。終わりの方には、独奏者の見せ場である“カデンツァ”という部分があります。第2楽章は、ゆったりとした優しい音楽で、穏やかな雰囲気に包まれます。第3楽章は独奏ヴァイオリンとオーケストラの弦楽器がロマンチックな音楽を奏でたあと、突然音楽がパツと明るくなり、祝祭的で華やかなフィナーレを迎えます。

ベートーヴェン： 交響曲第5番 八短調 op.67 《運命》



Ludwig van Beethoven

メンデルスゾーンと同じくドイツで生まれ、のちにオーストリアのウィーンで活躍したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、生涯に9つの交響曲を残しています。第5番は4年以上の年月をかけ、38歳の時（1808年）に完成させた作品です。そのころのベートーヴェンは、難聴に苦しみながらも心を奮い立たせて、ピアノ・ソナタ第23番「熱情」、ピアノ協奏曲第5番《皇帝》、交響曲第6番《田園》などの名曲を次々と生み出しました。

この交響曲第5番で、ベートーヴェンはいくつもの新しいチャレンジをしました。たとえば、冒頭の「ダダダ・ダーン」という力強いモチーフは、4つの楽章に何度も現れて統一感を与えます。そのような交響曲の作り方は、当時としてはとても斬新でした。ベートーヴェンがこの部分を「このように運命は扉を叩くのだ」と語ったと伝えられたことから（本当に言ったかどうかは分かっていませんが）、この交響曲は「運命」と呼ばれるようになりました。また、使う楽器も革新的で、トロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットという、それまで交響曲では使用されてこなかった楽器も加えました。また第3楽章と第4楽章とをつなげて演奏する「アタッカ」と呼ばれる手法も編み出しました。第3楽章の終わりはティンパニが「タタタン・タタタン」というリズムを静かに打ち、弦楽器が加わって徐々に響が強まります。そしてオーケストラ全体が力強く鳴り響くところが第4楽章です。ベートーヴェンは2つの楽章をつなげるにより、暗く長いトンネルを抜け、輝く陽の光のもとに出たかのように、「暗から明へ」というドラマをはっきりと描き出したのです。

文/飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

東京都交響楽団YouTubeチャンネルでは、オーケストラで使われる楽器の紹介等を行っています。番外編として、都響のリハーサル室と道具のご紹介もしています。舞台上上がる演奏者を支える舞台スタッフの仕事にもご注目ください！

どこでも都響の演奏が楽しめる！
ご覧いただくとともに、チャンネル登録もお願いいたします。

都響公式 YouTube チャンネル



公式SNSでも情報を発信しています！

都響

検索



<https://www.tmsor.jp/>